船守弥三郎殿許御書　　弘長元年六月二七日　四〇歳

わざと使ひを以て、ちまき・さけ・ほしひ・さんせう・かみしなじな給び候ひ畢んぬ。又つかひ申され候は、御かくさせ給へと申し上げ候へと、日蓮心得申すべく候。

日蓮去ぬる五月十二日流罪の時、その津につきて候ひしに、いまだ名をもきゝをよびまいらせず候ところに、船よりあがりくるしみ候ひきところに、ねんごろにあたらせ給ひ候ひし事はいかなる宿習なるらん。過去に法華経の行者にてわたらせ給へるが、今末法にふなもりの弥三郎と生まれかはりて日蓮をあわれみ給ふか。たとひ男はさもあるべきに、女房の身として食をあたへ、洗足てうづ其の外さも事ねんごろなる事、日蓮はしらず不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまりありて内心に法華経を信じ、日蓮を供養し給ふ事いかなる事のよしなるや。かへる地頭・万民、日蓮をにくみねたむ事鎌倉よりもすぎたり。見るものは目をひき、きく人はあだむ。ことに五月のころなれば米もとぼしかるらんに、日蓮を内々にてはぐくみ給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊東かわなと云ふところに生まれかはり給ふか。法華経の第四に云はく「及び清信士女を遣はして法師を供養せしめ」云云。法華経を行ぜん者をば、諸天善神等、或はをとことなり、或は女となり、形をかへ、さまざまに供養してたすくべしと云ふ経文なり。弥三郎殿夫婦の士女と生まれて、日蓮法師を供養する事疑ひなし。さきにまいらせし文につぶさにかきて候ひし間、今はくはしからず。

ことに当地頭の病悩について、祈せい申すべきよし仰せ候ひし間、案にあつかひて候。然れども一分信仰の心を日蓮に出だし給へば、法華経へそせうとこそおもひ候へ。此の時は十羅刹女もいかでか力をあはせ給はざるべきと思ひ候ひて、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏並びに天照・八幡・大小の神祇等に申して候。定めて評議ありてぞしるしをばあらはし給はん、よも日蓮をば捨てさせ給はじ。いたきとかゆきとの如く、あてがはせ給はんとおもひ候ひしに、ついに病悩なをり、海中いろくずの中より出現の仏体を日蓮にたまはる事、此の病悩のゆへなり。さだめて十羅刹女のせめなり。此の功徳も夫婦二人の功徳となるべし。

我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしが、法華経の行者となりて無始色心本是理性・妙境妙智金剛不滅の仏身とならん事、あにかの仏にかはるべきや。過去久

遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。法華経の一念三千の法門、常住此説法のふるまひなり。かへるたうとき法華経と釈尊にてをはせども凡夫はしる事なし。寿量品に云はく「顚倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ」とはこれなり。迷悟の不同は沙羅の四見の如し。一念三千の仏と申すは法界の成仏と云ふ事にて候ぞ。雪山童子のまへにきたりし鬼神は帝釈の変作なり。尸毘王の所へにげ入りし鳩は毘首羯摩天ぞかし。班足王の城へ入りし普明王は教主釈尊にてまします。肉眼はしらず、仏眼は此をみる。虚空と大海とには魚島の飛行するあとあり。此等は経文にみえたり。木像即金色なり、金色即木像なり。あぬるだが金はうさぎとなり死人となる。釈摩男がたなごころにはいさごも金となる。此等は思議すべからず。凡夫即仏なり、仏即凡夫なり、一念三千我実成仏これなり。

しからば夫婦二人は教主大覚世尊の生まれかわり給ひて日蓮をたすけ給ふか。伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし。後のためにふみをまいらせ候ぞ。人にかたらずして心得させ給へ。すこしも人しるならば御ためあしかりぬべし。むねのうちにをきてかたり給ふ事なかれ。あなかしこあなかしこ。南無妙法蓮華経。

弘長元年六月廿七日　　日　蓮　花　押

船守弥三郎殿許へ之を遣はす